

「知」の暗黒時代を短くするために

中串 孝志

1. 序

「ひろば」¹は、数値に落とし込んでしまう旧来の授業アンケートに代わる、学生と担当教員との「対話」の場としてインターネット上に作られた、いわゆるBBSのようなものである[中串・西田(2016)]。有効活用している科目もあるが、限られていると言わざるを得ない。学生が自分から進んで利用できるような整備がまだまだ必要でもあろうが、利用している科目担当者に非常に偏りがあることから、担当教員が利用を呼びかけていないことが容易に想像できる。教員が「対話」に参加する気になっていないと言わざるを得ない。

大学教員が学生との「対話」をせずに、誰と「対話」をするというのだろうか？

…と、ここまで考えた時、そもそも大学教員は誰とどのように「対話」すべきなのかについて整理して考えるべきではないか、そしてこれを端緒に諸問題を考察してみようと思い至った。そこで本稿では幾つかの場面を取り上げながら、この問いを、そして「教養」あるいは「知」の諸問題に対する「対話」の役割、大学教員を含む学者の役割について考えてみたい。

13♦

2. 「対話」における立場の優位性：科学コミュニケーション論

科学コミュニケーション論では、特に1980～90年代頃から、科学の権威が失墜し、科学「普及」の施策が成立しなくなると同時に、非専門家である一般市民と専門家との「対話」の場を求める機運が高まっていったとされている[例えば藤垣・廣野(2008)など]。それまでは専門家への信頼に支えられ、相対的に「優位」な立場のままでも（一方向的に）意志伝達が成立したが、BSE問題など科学に関する事件が起こり、専門性への尊敬・信頼が失われてしまったため、従来のあり方が通用しなくなったわけである。新たな「対話」の場は特にヨーロッパでは社会的意志決定において求められ、そこでは一般市民も専門家も互いに立場がフラットであることが重視される、と言われている。

ここで「立場がフラットである」とは、その場における意見の重さ、意志決定における権限の強さがフラット（平等）であることを意味している。しかし、その意味での平等性が実現したとしても、実際の「対話」の内容については依然として専門性の高さによる優位性があるため、常に科学者側はわかりやすく説明す

る義務を負う。つまり「対話」においては依然として立場には格差があり、科学者は上から「降りて」いかなければならない存在であることは、変わっていないことになる。

筆者は本年報第1号で、現代社会における科学コミュニケーションの崩壊と教養との関わりを論じた[中串(2015)]。その中で、科学のみならず学問全般に対して同様のこと、いわば「学問コミュニケーション崩壊」が起きているとも指摘した。第4号では「知」そのものの価値の転倒が起きていること、即ち現代に於いては「知」は無価値であり場合によっては悪となることを論じた[中串(2018)]。

専門家の立場(の優位性)は、「知」の専門性に価値があることを暗黙の前提としていた。しかしその前提条件が消滅してしまったこのご時世では、その立場の存在理由は雲散霧消したと言って良いだろう。それを生業とする「学者」は、当然の帰結として、この世に存在価値は無い。我々大学教員ももちろん例外ではない。「役に立つ/立たない」のみが唯一の価値基準となってしまった、価値観の変わり果てた現代に於ける大学教員の「対話」は、この、自らの価値の喪失の自覚無くして成立しないはずである。我々大学教員を含むアカデミアの住人は、同業者でない誰かと「対話」するときには、「わかるように自分が降りて行く」如く「上」から始まるのではなく、「お願いだから聞いて下さい」と「下」から始めなければいけないのである。なぜなら我々の存在理由に必然性はなく、それゆえに我々の話など聞く価値の必然性などないからだ。

◆ 14

3. 研究の場における「対話」: 敵を作って世に出す仕組み

少し戻って、「専門家の立場」の根拠がまだ存在する可能性のある現場を考えてみよう。それは「研究の場」である。中でも、研究発表の場は「対話」がありそうである。

研究発表の場において、質疑応答は、「画竜点睛(を欠く)」の「睛」に当たるものである。聴衆が興味を持ってくれたからこそ厳しいツッコミが入るのであり、くだらない研究には誰も反応しない。

このような研究発表の場で、彼我の格の違いがお互いに自覚されている(あるいは誰の目にも明らかである)にも関わらず、敢えて格上の者がマウントポジションを取って殴りかかるのを「(教育のための)議論」と呼ぶ風習が分野によっては見られたと聞く。「叩いて伸ばす」と言うのである。かつてはそれでもよかったのだろう。しかし前節で指摘したように、学問にもそれに関する専門性にも価値は無いこの御時世に於いては、その幻想に支えられた「格」を誇示する

ことは、ハラスメントでしかなく、ただの時代錯誤であろう。そこに「対話」は存在し得ない。特に大学教員が学生に対する場合にはもう一つ重要な、忘れてはいけないことがある。それは、いくらその場が研究の場、アカデミ的な場であったとしても、そこに参加する殆ど全ての学生はアカデミアの住人にはならない現実である。「学び」や「知」の意味・価値が完全に変わってしまった現代に於いては、殆ど全ての学生は「就職後には役に立たない」無価値な苦役を強いられている。従って、(既に幻想と化した)旧来の価値観を学生に理解して頂くことをせずに、幻想に溺れたままハラスメントを行うなら、学問への興味・関心の芽を摘むどころか、アカデミアの外へ出て行く殆ど全ての人々を敵に回すだけである。

逆に、マウントポジションを取って上から格の違いを見せつける一方的説教とは異なる、「対話」を大切にした「愛のある議論」は存在するのである。かつて筆者が大学院生だった頃、筆者の発表に対して先輩方や先生方は厳しいツッコミを入れた。しかしそれは全て「潰しにかかる」ハラスメントではなく、興味を持ってくれた上で「そういうことをしたいなら、こんないいものがあるのに、なんでやらないの?」と、いわば「オススメ」があるからこそその発言であった。結果としてこちらが恥を感じることはあっても、恥をかかせる発言ではなかった。その場の後にこちらから真摯に教えを乞いに行けば、本当に親身に、そして率直に疑問の真意の説明やサジェスチョンを授けて下さるのである。筆者は大学院時代、研究発表で厳しいツッコミを入れてきた人のところにあとで敢えて近づいて、教えを乞うた。何度かそのような機会があったが、ある先輩の場合、研究室に押しかけ議論させて頂いた勢いで筆者自らルームメイトになり、そしてその後もたくさんのことを教わり、今でも可愛がって頂いている。

15♦

筆者はアカデミアを目指していたのでこのような「研究発表の後の場」を自ら進んで設ける気になることができたが、そうでない殆どの学生にこれを期待することはできない。であれば、そもそもの議論や質疑が、学術的・専門的内容の当否等について「愛のある議論」であることが必須であり、さらに後述するように長期的な視点で見れば、それに留まらず、当世的な「役に立つ/立たない」軸のみの価値観とは異なる価値観の魅力を湛えたものでなければ、やはり敵を作って世に送り出すことになるだろう。

4. 大学での授業：講義は「一方向」ではあり得ない

続いて、まだ専門性の高さへの旧来の価値観が形式的に残っている場として、大学の授業を考えてみる。

授業は常に「対話」である。それはいわゆる講義と呼ばれる形式であっても、である。昨今のアクティブ・ラーニング推進においては「主体的、対話的で深い学び」のために座学あるいは講義でない形式での授業が持て囃されるが、形式的には一方向的に見える講義であっても実際には「対話」していなくてはならない。相手が学生であれ、同業者であれ、一般のお客様であれ、そもそも人前で話す場では常にそうである。それがプレゼンテーションの最低限のマナーというもののだろう。

黎明期の学術プレゼンテーション論の一つ、松田（1999）は²、「2.7 一般的聴衆とは何か」の中で、次のように述べている：

一般的聴衆は、あなたが大家か友人でもない限り、あなたの話など聞きたくない。だから彼らは、あなたの話がおもしろくないと見るや、(1) 会場を抜け出す、(2) 居眠りをする、(3) 白昼夢にふける、(4) 予稿集の関係ないページを読む、(5) 新聞やその他の本を読むなどの内職にふける、ことを虎視眈々とねらっている。

もちろん、授業中の受講生（学生）も同様であるし、そこで行なわれている講義も学術プレゼンテーションである。そのような「一般的聴衆」である受講生に対して、手前勝手に自己満足な旧来の価値観を前提とした学術の話をつらつらと続けても一切耳に届かないであろう。繰り返すが、現代では「一般的聴衆」にとって学術的な「知」に価値は無いのである。

さらに松田（1999）はアイコンタクトの重要性を説いているが、そこで想定されている短時間の研究発表でない90分の長丁場である大学の授業ではなおのことである。受講生の目を見て話し、その声ならぬリアクションを読み取りながら、それに応えていかなければ、即ち「対話」していなければ、とても講義など成立しない。つまり「一方向」ではそもそも講義になっていないのである。これは大教室での講義でも全く同じである。大教室での講義の後は大変な疲労に襲われるが、これは大教室では瞬時に大量の「対話」を行い続けることを要求されるからである。

ここまでは、プレゼンテーションの技術論の観点から言える要件について述べたものである。これら技術的要件を満たした上でさらに、辛うじて我々大学教員が提供できるコンテンツさえも価値が失われていることを踏まえて、講義に臨まなくてはならないのである。烏滸がましくも社会的に無価値な人間が、アカデミアの外へ出て行く皆様の前で話させて頂くことの有り難みを理解してから壇上にかかるべきだろう。

5.「教養の森」ゼミナール：「対話」の場になることができていたか？

本年報で授業における「対話」を論ずるのであれば、筆者も担当教員の一人である「教養の森」ゼミナール（以下「森ゼミ」）に触れないわけにはいかない。

この科目は、本来の「教養」を体得させるべく、それまでになかった新しいやり方を模索する試みから始まった。紆余曲折、試行錯誤の末に収束していった方向性は、学年・学部・職業・年齢等々の立場の異なる人々が集まってフラットな議論を目指すサロンのような場を作ることであり、そこでは立場の違いを乗り越える「対話」を通じてお互いに学ぶことが狙いとなっている。

この森ゼミ、始まってから7年目が終わろうとしているが、果たして「対話」の場になることができたのだろうか。筆者を含む担当者・関係者は、そろそろこのことを真摯に問い直さなければならないと、筆者は考えている。

筆者は森ゼミに於ける「道化師」のような役割を（勝手に）自認している。学生とそれ以外の参加者のちょうど年齢的中间にいるらしく、そうであるなら、双方の「対話」の橋渡し役、翻訳、カンフル剤等々の役割を担うべきであろうと考えるからである。しかし、その筆者がうまく口を挟むことができないので、ともすれば先生方同士でのキャッチボールに終始してしまうことが起こりがちであるように思われる。多くの学生は未だ「対話」に慣れていないこともあり、やっとのことで話し始めた学生のことばを教員が叩き潰してしまうこともよくあった。これでは学生からの発言は続かない。筆者の力不足は大きい。そもそも道化師というものは名人でなければ務まらないものである。筆者もまだまだ森ゼミで学ばなければならない。

森ゼミはまた、自分の地力が、もっと言えば一夜漬けの予習などでは取り繕えない「素の自分」が露わになる場でもある。自分自身を磨こうとする向上心が平素から作動していなければ、とても見せられるような「素の自分」を用意できない。「対話」の中で露呈するその地力、「素の自分」こそ、自らが身につけてきた「教養」であろうと筆者は考えている。

6. 学者と非学者との「対話」：「学者＝変人」の呪縛をどう打破するか？

アカデミアの住人ならかなり多くの人々が酒場で経験するであろうことを一つ挙げてみよう。それは、我々の身分が大学教員や（非企業の）研究員などの「研究者」「学者」であることがその場で知られると、途端に呼称が「センセイ」に変わる現象である。そして、その上で同じく突然に「リッパな人」「エライ人」として扱われ始める。そして「何だかわからないけどスゴイこと」をしているの

だろうと持ち上げられる。

さらに時間が経ち、少し打ち解けてくると、多くの場合には質問タイムを挟んでから、関西弁で言うところの「おちょくり」「いじり」が始まる。酔いの具合にも依るが、場合によっては笑い話を装おって喧嘩を吹っ掛けられたり、またある場合には「ご存知ないでしょうが世間ではかくかくしかじかなんですよ」と説教を垂れられたりする。いつでもどこでも、筆者が黙っていて同席した同業者が話していても、判で押したように同じ進行なので、これは筆者のキャラクターやその場の話の流れの問題ではなく³、我々の肩書き、即ちアカデミアの住人であることをその人々がどのように見ているかの表れだろうと考えられる。

このように酒場の人々が我々の扱いをわざわざガラッと変えなければならないのはなぜか。なぜそんな必要があるのか。相手（＝我々）が普通ではない人物、即ち自分たち（＝酒場の人々）と同じではない種類の人物、自分たちの世界の外の人物だからである。普通ではない人のことを、日本語では「変人」と呼ぶ。

上の例で明らかなように、我々アカデミアの住人は、そもそも、彼ら/彼女らの言う「普通の人」、平たく言えば「みんな」の中に入れてもらえていないのである。先に触れた「センセイ」の呼称は、決して敬称などではなく、「みんな」の一員でないことを示す蔑称「ガクシャセンセイ」の省略形なのである。この「みんな」の世界の外に生きる「ガクシャセンセイ」の扱う何だかわからないけどスゴイこと即ち「研究」や「学問」をなぜ持ち上げるかということ、それは要するに「そういうのは必要だとは思うけど、よそでやってくれ」と言外に言っているのである。だから例えば、「外」からいくら研究予算のあり方がおかしいとか大学が危機にあるとか叫んでも、たとえそれがノーベル賞受賞者が口を揃えて訴えることであっても、「みんな」には届かないのである。公的予算は「みんな」のためのものなのだから。

まずは我々一人一人が「同じ世界にいる」ことを理解してもらわなければならない。そのためには、我々一人一人が「普通」の人たちと「対話」を試み続け、誤解を解いていかなければならない。前述の「研究の場（での学生への接し方）」や「大学での授業（森ゼミも含めて）」等も同様で、この認識こそが「対話」の出発点なのである。

そのつもりで（特に酒場で）「普通」の人たちと話せば、自分たちがいかに「（「みんな」の）社会にとって不要なもの」と認識されているかがよくわかるだろう。このことは、学者が自分から「社会の役に立たないことをやってるからねえ」などと（時には自虐的に）述べるのとは全く意味合いが異なる。世の人々がアカデミアの人々を「ガクシャセンセイ」と呼びたがるのは完全なる蔑称であり、唾棄すべきもの、忌むべきものとしていることの表れである、ということ

を、アカデミアに生きる人間は自覚すべきである。この自覚こそが「対話」を成立させるためのスタートラインである。しかるに「予選落ち」のガクシャセンセイのなんと多いことか!

また同じく「普通」の人々と話してすぐに体感されることだが、この「学者＝変人」の呪縛は、とんでもなく強固なものである。筆者の見るところ、辞書的な意味での「変人」に遭遇する確率（分布の割合）は、アカデミアでも非アカデミアでもおそらく変わらない（ただしアカデミアの方が「振れ幅」は大きいかもしれない）だろうから⁴、実際には「変人」であることと「学者」であることとは無関係であるはずなのだが、どう説明しても「学者＝変人」という、「みんな」の前提は覆らない。しかしもっと悪いことは、そのような役割は学者が社会から「担わされている」ものであるにも関わらず、それを学者側が内面化していることである。前世紀の中盤くらいまでは「変人」であることも学者になるための一つの必須要素だったのかもしれないが、同じく終盤には、既にそれでは職業としての「学者」業は成り立たなくなっていたことは、アカデミアの住人であれば周知の事実であろう⁵。

今の大学の窮状は、このような位置付けから必然的に生じたものである、という面は大きいと筆者は考えている。今まで述べてきたことを踏まえれば、アカデミア自ら招いたものとも言える。この状況を打破するためには平素から周囲の人たちとの「対話」が必要だが、そう簡単には「対話」は成り立たないのが現状である。

19•

7. 音楽における「対話」、ジャズにおける「対話」: Open-minded であること

では、どのように「対話」すればいいのか? 筆者自身の取り組み、考え方でしかないが、ここで触れておきたい。

筆者の考えるところでは、「対話」に必要なことは、「Open-minded であること」である。しかしこの“Open-minded”なる言葉は意外に和訳しづらい表現である。少なくとも1990年代のジャズ雑誌の外国人ジャズ・ミュージシャンへのインタビュー記事でよく見かけたように筆者は記憶している。

音楽は常に時間の流れとともに次から次へと発生していく芸術である。必然的に、その演奏の場においては、それまでに奏でられた音楽（の文脈）を受け継ぎ、次の音楽へ繋いでいくように、音楽を発しなければならない。前の音楽から次の音楽へ、常に「対話」が行われているのである。ジャズにおいてはこれが顕著に現れる。というより、その「対話」自体がジャズの本質である。筆者は中学生から吹奏楽に没頭してきたが、それに加え、特に大学生時代、ジャズセッション

ンのような場にも参加することが少なくなかったため、この“Open-minded”の感覚が大いに磨かれたように思う。そしてこの感覚が言語を介した「対話」でも大いに活かされている。

…と言っても音楽演奏の経験が少ない読者諸兄姉にはイメージしづらいと思われるので、以下に、筆者も関わる和歌山大学主催の地域向けサイエンスカフェイベント「宇宙カフェ」50回記念に寄せた文章から一部を引用する⁶：

（前略）さてカフェイベントは研究者と参加者が「対等に」コミュニケーションする場である、と言われます。私はこのカフェイベント（サイエンスカフェ）という場そのものに興味を持っていて、その意味では、毎回「実験」をさせて頂いたわけですが、実験の重要な要素の一つは、テーマ設定でした。刺激的なテーマ設定をせよ、と物の本には書かれているのですが、単にセンセーショナルなだけではなく、あえて自分が困ってしまって恥をかくような、自分のキャパシティを超えるテーマ設定をすることで、「誰にも答えがない」空間を作ることが、「対等」を生み出すのではないかと、どの思いがあったからです。宇宙カフェでは私自身の研究を全否定されかねない厳しいお言葉も頂きました。テーマ設定がうまくいった証拠なのですが、なかなかつらいものです（笑）

◆ 20

そんな試行錯誤の中で、最近「オープン・マインドであること」のようなものをつかめそうな気がしています。その場に偶然発生した音楽の流れで勝負するジャズ・ミュージシャンたちが好んで使う言葉でもあります。知らないこと、できないこと、わからないことに出会っても、知っていること、できること、わかる範囲のことを、気取らず背伸びせず自然に行う。自信の有る無しと関係なく、気持ちがオープンでなければできません。かと言って単に何でもかんでも開けっぴろげというわけでもないのですが、とにかく、そうやっている中で、中串孝志という「ひと」がポロっと出てしまうことも含めて、カフェのコミュニケーションなのかもしれない、と思います。そんなカフェイベントに携わる以上、ポロっと出てしまっても大丈夫な自分作りに平素から努めなくてはいけないなあ、と思う次第です。（後略）

“Open-minded”に関して、一つ確実に言えるのは、ここでの「対話」を支えるのは「練習量」であることである。音楽の場合、文字通りの練習量である。ジャズのインプロビゼーション（即興演奏）は、自分の内面から湧き出てくる音を紡ぐように表現されることもあるが、実際には練習したことのないフレーズはできない。どんな良いフレーズを思いついても、どんな素晴らしい流れがやってきても、それに対応出来る演奏能力がそもそも備わっていなければ実行不可能で

ある。

おそらくこのことは音楽に限らない。例えば1回生にグループワークと称してディスカッションをさせても、相当うまくファシリテートしなければ（有り体に言えば「仕掛け」なければ）、ただの雑談、ダべっただけで終わってしまう。「対話」にならないのである。この問題は、おそらくどの大学教員も悩まされたことがあるに違いない。音楽と同じく、「対話」には基盤となるもの、地力が必要なのである。「対話」の中で試されるこの地力が「教養」と呼ばれるものなのであることは、先に述べた通りである。

8. 結語

これだけ学者不要論的な枠組みから逃れられない人々が世の多数派を占めるようになってしまうと、その意向や発想は自然に文教政策に表れてくる。実際、そのような例は枚挙に暇が無い現状になってしまった。日本の学術的「知」を不要とする施策が進みに進んだ現状は、筆者の個人的な印象でしかないが、病気に喩えれば末期症状、「もう助からない」状況ではなかろうか。残念なことだが、恐らく、ある時点で——おそらく50年もしないうちに、日本の「知」は完全に崩壊し、失われてしまうだろう。「知」を扱い生み出すことを生業とする者（学者）は減び、現在「大学」と呼ばれているものは「職業訓練所」、または中学高校と同じ意味での「ガッコー」——「高等教育」という名の下に最低の教育を保証するための場所——になるだろう⁷。かつて永きにわたって栄華を誇った和歌山市の中心街・ぶらくり丁はたった20～30年で一気にシャッター街と化したという。世界に誇った日本の「知」の大通りは、シャッター街と化すまであと何年保つだろうか？

加えて言うならば、「知」の無用論、学者不要論は、日本だけではなさそうに、筆者には見える。もしこれが正しいとすれば、それは即ち日本で確実に起こるであろう知的崩壊が、時間差こそあれ世界的にも起こるであろうことを意味する。それは、日本（がそうなるのは当然として、それ）だけでなく世界が文化的あるいは文明的な「停滞期」に落ち込み、その性質ゆえにそこから抜け出せない、いわゆる「中世」の語にまとりつくイメージであろう、長く続く「暗黒時代」に突入することを意味するのではないか——それは歴史の専門家に相談しなければ何とも言えないが、筆者にはそんな予感がしてならない。仮に「知」の暗黒時代に突入するのが不可避であったとしても、それを短くすることはできるかもしれない⁸。その観点で、世がその暗黒の停滞期から抜け出す知の光の源となる人が生まれる可能性を少しでも多く残すこと、現代と異なる価値観の「種

子」を蒔くことが今を生きる我々の世代のアカデミアのなすべきことだとすれば、我々は、「役に立つ／立たない」とは異なる価値観・価値尺度もあるのだと理解する人を、「対話」を通じて少しずつ、草の根運動の如く、「みんな」の中に作っていかねばならないのである。そのためには、「みんな」の一員であると認めてもらえるよう、つらい「対話」を——笑顔の裏で身を削り血を流しながら——あらゆる場で続けなければならないということなのである。学者が減ぶその日まで…。

さあ、学者たちよ、酒場へ出掛けよう！

References

- 中串孝志, 聞くは一生の恥、聞かぬは一時の恥, 和歌山大学「教養の森」センター年報, 4, 29-37, 2018
- 中串孝志, 教養は絶望の向こうに —科学コミュニケーションの現場から—, 和歌山大学「教養の森」センター年報, 1, 40-44, 2015
- 中串孝志, 西田沙織, 教養教育オンライン交流システム「ひろば」, 和歌山大学「教養の森」センター年報, 2, 59-66, 2016.03.31
- 藤垣裕子, 廣野喜幸, 『科学コミュニケーション論』, 東京大学出版会, pp.284, 2008
- 松田卓也, プレゼン入門：よりよい科学的プレゼンテーションを目指して, 素粒子論研究, 99, 2, B10-B17, 1999

◆ 22

Notes

¹ <http://www.wakayama-u.ac.jp/kyoyonomori/hiroba/search.php>

² OHPシートによるプレゼンがパソコンに置き換わっていく前夜だった筆者の院生時代、学術の場におけるプレゼンテーション技術に関する文献は殆ど無く、（少なくとも天文学周辺では）この文献はほぼ「バイブル」と呼んで良い存在であった。

³ 後半に関しては、ひょっとするとキャラクターと言うより年齢のせいである可能性はあり得る。

⁴ 筆者はこのことを力説したいのだが、そのようなものは調査のしようがないので、それも叶わない。

⁵ 2019年初頭現在、京都大学で継続して開催されている大人気の一般向けイベント「京大変人講座」では「変人はホメ言葉である」と高らかに謳われるが、本稿の「変人」とはややニュアンスが違う。京大変人講座の変人は「みんな」の中（だが端の方）にいるが、本稿の「変人」は「みんな」に入れてもらえていない。

⁶ 2015年9月23日開催。当日の会場でパネル展示された。

⁷ 大学ジャーナルオンラインの記事「進路の見込めない専攻を縮小へ、大学院改革で中教審」（<https://univ-journal.jp/24566/>）では、平成31年1月22日付けで中央教育審議会大学分科会が大学院教育の改善策として打ち出した方針「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿 ～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1412988.htm)の概要が報じられているが（2019年2月4日確認）、まさに日本の知的崩壊が実体を伴って進行していることが見て取れる。

⁸ 古典SFの傑作であるI. アシモフ『ファウンデーション』シリーズは、亡びゆく銀河帝国を予見し、滅亡後にやってくる暗黒時代をせめて短くしようという使命を帯びた集団「ファウンデーション」をめぐる未来史であるが、筆者には目の前の現実とダブって仕方がない。